組織キャンプにおける仲間づくりの特徴
～参加者の所期の思いとキャンプ中の声かけの相関の視点から～

東　雅宏
（白山市教育委員会）

【要旨】
本稿は、小中学生を対象とした組織キャンプにおいて、参加者一人ひとりの所期の思いとキャンプ中の他の参加者への声かけの相関を分析し、組織キャンプにおける仲間づくりの特徴を明らかにしたものである。
参加申し込み時から仲間づくりを期待している参加者群は、活動の1日目から継続的に他の参加者に声かけを続けている。一方、仲間づくりへの期待が所期の思いとして表れていない参加者群は、徐々に声をかける傾向が出てきており、5日目や6日目には参加者のほぼ全員が声をかけあう状況が生まれている。
仲間づくりを期待する参加者からの継続的な声かけが、他の参加者にも声かけの行動を誘発し、活動開始から5日目で仲間意識を全体に広げていることが明らかとなった。

1. 研究の背景と目的

教育的な意図や目的をもって行われる組織キャンプは、小グループにおける参加者同士の相互作用と、相互作用の媒体となる、自然を素材とした創造的なプログラムにより実施されている[1]。実際の組織キャンプの場面においても、参加者や指導者が自然の中で一定期間を共に生活することを通じて、集団あるいは個々に発生する様々な目標達成や問題解決に向かう場面が数多くある。それぞれの組織キャンプのねらいや活動内容によって教育効果の表れ方は様々であるが、活動中に数多くの場面に出会い、自然や他の参加者、指導者と関わり、対応していくことを要因として、達成動機の向上、自律心の向上、自己決定感の向上など多くの教育効果が表れてくることが明らかになってきている[2]。研究場面においてこれらの教育効果は、心理的側面への効果、社会的側面への効果、環境・行動的効果に分類される。これらの中で、仲間づくりなど、集団の活動の中で人間関係を形成していく力を向上させること、つまり、社会的効果に着目した研究も増えてきている[3]。たとえば、社会的効果についての研究では、ほかの人に対する振舞い方など対人関係にかかわる能力である社会的スキル[4]に関する研究がある。組織キャンプを社会的スキルトレーニングとして実施し、参加した子どもたちの社会的スキルの変容について検証されている[5]。この中で、積極的に他者と関わろうとする技術が組織キャンプ終了後に向上する可能性があると指摘されている。

一方、組織キャンプの指導者やプログラム、活動中の出来事が参加者の社会的成長を促しているだけではなく、参加者の所期の思いも自己実現への試行錯誤として行動に表れてきている[6]ことから、参加者が他の参加者に対して抱いている仲間づくりの意識が、活動

中の行動に表れ、共に行動する他の参加者の意識や行動場面へも影響を及ぼしているとも考えられる。

本研究は、仲間づくりの意識の低い参加者も仲間意識を持っている参加者からの声かけで仲間づくりの意識が高まってくるという仮説を立て、検証した。

2. 研究の方法

上述の目的を達成するために、石川県白山市において2004年から毎年実施されている白山市アドベンチャーキャンプ事業を事例として用いた。この事業では、活動を通して発見したことや感じたことなどを参加者一人ひとりが毎日記録している。自分と友だちとの関わりについても記録していることから、今回、2009年と2010年に実施された同事業の事例をもとに検証した。

(1) 白山市アドベンチャーキャンプ事業の概要

この事業は、「白山を中心とした国立公園の大自然を舞台とした異年齢集団による共同生活を通して、忍耐心や自立心、協調性など豊かな人間性を育むとともに自然環境を深く学ぶこと」[7]をねらいとして、白山市が市内の小学5年生から中学2年生を対象に募集要項を配布し、参加者を募り実施している。この事業の特徴として、以下の点が挙げられる。

①事業の期間を1か月以上としていること

この事業では、8月上旬に6泊7日の日程で実施される活動が事業の中心となるが、活動の開始前には、事前学習会とプレキャンプを実施している。事前学習会は、7月中旬に開催し、参加者同士や参加者と指導者の顔合わせの場となっている。また、7月下旬に実施するプレキャンプでは、班編成により野外調理やテント設営等を行い、基本的な野外活動の技術習得を目指している。さらに、6泊7日の活動のふりかえりを目的として、8月下旬に事後学習会を設定している。参加者同士が共に活動する期間が1か月以上に及ぶ。

本稿では、白山市アドベンチャーキャンプ事業全体のうち、事業の中心となる6泊7日の活動を「本キャンプ」と言い、分析対象とする。

②異年齢のグループで班を構成していること

参加者の子どもたちは、1班6名前後の異年齢・男女混合の小グループで構成され、本キャンプのプログラムや生活を共にしている。同じ学校からの参加者同士やこの事業の経験者同士が同一の班に偏らないようにも留意されている。各班の子どもたちは、班長や食材係、資材係など全員が役割を持っているが、役割を超えて全員で協力して活動ができるように行動を促している。また、各班には班付指導者として大学生が1名ずつ配置され、常に班の参加者の活動に同行する。班付指導者は、班活動を見守るとともに班の参加者一人ひとりの行動が円滑に進むよう支援を行っている。

③他の参加者との協力を必要とする活動を意図的に設定していること

本キャンプは、期間を通して班単位での行動を基本としている。期間の前半は、白山麓の豊かな自然を生かしながら、班のメンバーの協力により運営していく「仲間づくりのゲーム」や「まつり」などの活動に時間を多く費やしている。このような活動や毎食のための炊事により、参加者同士の関わりを意識し、互いに声をかけあう機会を多く持つことができるようにしている。期間の後半は、標高2,702mの白山に2日間かけて登頂する登山プログラムが活動の中心となる。2日間で標高差約1,450m、移動距離約18kmとなるこの活動

時間	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
5:00				
6:00		起床、朝の集い	起床、朝の集い	起床、朝の集い
7:00		炊事	炊事	炊事
8:00	松任文化会館集合	朝食・健康調査	朝食・健康調査	朝食・健康調査
9:00	出発式・移動		まつり準備	撤収、移動
10:00	中宮スキー場到着			市ノ瀬野営場到着
11:00	テント設営	沢のぼり		テント設営、炊事
12:00	昼食（持参食）	昼食	まつり（昼食）	昼食
13:00	仲間づくりゲーム		後片付け	周辺散策
14:00			班集会	
15:00		入浴		登山の準備
16:00	炊事	炊事	炊事	入浴
17:00	夕食	夕食	夕食	炊事、夕食
18:00				
19:00	班営火	ナイトゲーム	全体営火	1日のふりかえり
20:00	1日のふりかえり	1日のふりかえり	1日のふりかえり	消灯
21:00	消灯	消灯	消灯	
活動場所	中宮温泉スキー場			市ノ瀬野営場

時間	第5日目	第6日目	第7日目
5:00	起床、炊事	起床、炊事	
6:00	朝食・健康調査	朝食・健康調査	起床、清掃
7:00	撤収	白山登山開始	朝食・健康調査
8:00	移動		ふりかえり＆作文
9:00	白山登山開始		
10:00			
11:00			昼食
12:00	（昼食）	昼食	移動
13:00			松任文化会館到着
14:00	南竜山荘到着		お別れの集い
15:00	周辺散策	別当出合到着	解散
16:00		移動	
17:00	夕食	入浴	
18:00		夕食	
19:00	1日のふりかえり	ふりかえり	
20:00	消灯	1日のふりかえり	
21:00		消灯	
活動場所	白山		中宮セミナーハウス

図1　本キャンプの日程

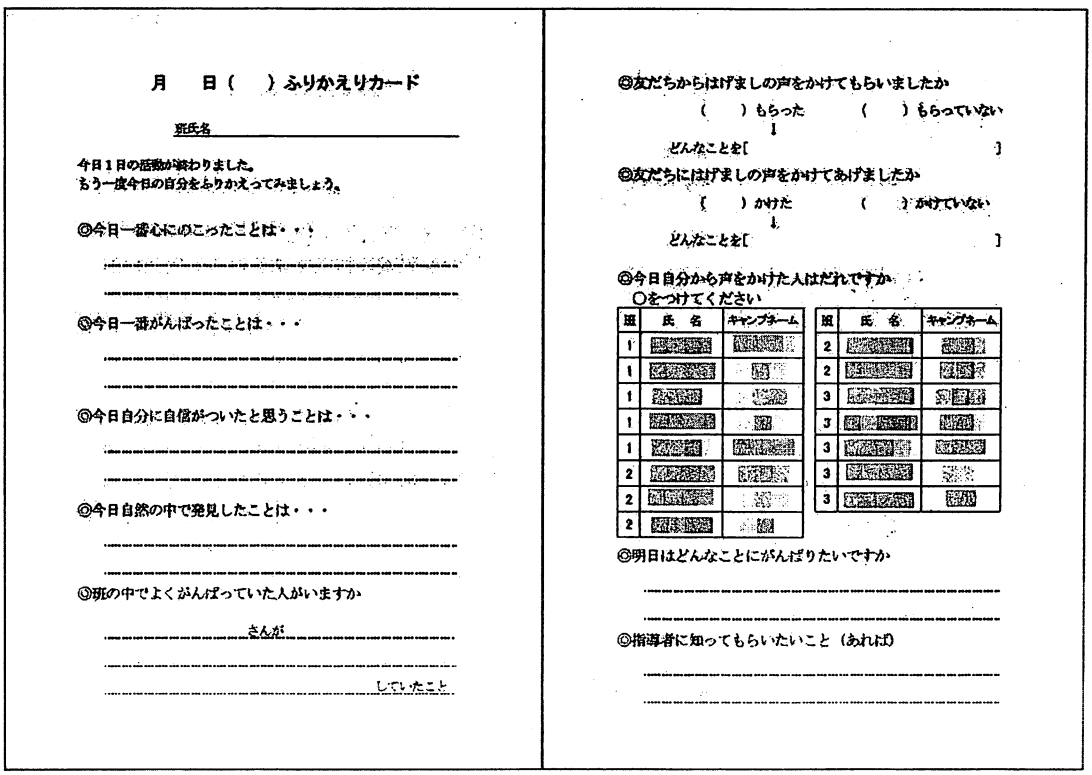
では、登山中の移動ペースや班内で分担して持つこととなる装備の割り振りが各班に任せられている。登山プログラムを通して参加者同士が関わり合いながら活動を進めていくように設定されている。本キャンプの日程の概要は、図1のとおりである。今回の2009年と2010年の事例においても、同様のプログラム構成で実施している。

④参加者の思いを表す機会を多く設定していること

参加者の参加動機については、参加申し込み時に申込書に記入してもらうほか、保護者からもこの事業への思いを記入してもらっている。また、事前に開催する保護者説明会において、保護者から個別に参加者や保護者自身のこの事業への思いを面談で聞き取り、本キャンプの運営につなげている。

本キャンプ期間中においても、1日目には、「1週間後の自分へ」と題して、1週間後に自分がどうなっていたいのかを自分宛の手紙として書き綴っている。このほか、4日目には家族に宛てた手紙を書く場面、6日目の夜には参加者、スタッフ全員でこれまでの活動で感じたことを語る場面、7日目には1週間の思い出を書き綴る場面を設けている。

さらに、1日のふりかえりとして、6日目までの毎晩、活動が終了する際に参加者一人ひとりに「ふりかえりカード」を記入している。その日にあった出来事を思い起こし、自分のこと、自然のこと、友だちのことで発見したことを活字にしている。このカードでは、自分から声をかけた友だちについても記入する内容としている。カードの内容については、図2のとおりである。



月　日（　）ふりかえりカード

班氏名

今日1日の活動が終わりました。
もう一度今日の自分をふりかえってみましょう。

◎今日一番心にのこったことは・・・

◎今日一番がんばったことは・・・

◎今日自分に自信がついたと思うことは・・・

◎今日自然の中で発見したことは・・・

◎班の中でよくがんばっていた人がいますか

さんが

していたこと

◎友だちからはげましの声をかけてもらいましたか

（　）もらった　（　）もらっていない

どんなことを［　］

◎友だちにはげましの声をかけてあげましたか

（　）かけた　（　）かけていない

どんなことを［　］

◎今日自分から声をかけた人はだれですか
○をつけてください

班	氏名	キャンプネーム
1		
1		
1		
1		
1		
2		
2		
2		

班	氏名	キャンプネーム
2		
2		
3		
3		
3		
3		
3		

◎明日はどんなことにがんばりたいですか

◎指導者に知ってもらいたいこと（あれば）

図2「ふりかえりカード」（A5版両面）

(2) 白山市アドベンチャーキャンプ事業の参加者

2009年8月2日から8日までの日程で実施の白山市アドベンチャーキャンプ2009に参加した小中学生16名全員（男子10名、女子6名）と2010年8月8日から14日までの日程で実施の白山市アドベンチャーキャンプ2010に参加した小中学生15名全員(男子5名、女子10名）を分析対象とした。

(3) 分析の方法

参加者の申し込み時におけるこの事業への期待や思いを記入した参加申込書、本キャンプ1日目における1週間後の自分宛の手紙の文言から、仲間づくりを期待する参加者群(以下、「A群」という）とそれが文言に表れていない参加者群（以下、「B群」という）に分類した。

2009年の事業では、参加者16人のうちA群が10人、B群が6人であった（表1-1)。また、2010年の事業では、参加者15人のうちA群が9人、B群が6人であった（表1-2)。参加者の所期の思いを示すこの分類と本キャンプ中の毎日の活動終了時に記入する「ふりかえりカード」の「今日自分から声をかけた人」の記述をもとに、それぞれの群の「声をかける」「声をかけられる」数の変化を比較した。

属性	計	(人)	
		A群	B群
中2男子	3	2	1
中2女子	1	1	0
中1男子	5	2	3
中1女子	1	1	0
小6男子	1	1	0
小6女子	3	1	2
小5男子	1	1	0
小5女子	1	1	0
計	16	10	6

表1-1 被験者の内訳2009

属性	計	(人)	
		A群	B群
中2男子	4	2	2
中2女子	3	3	0
中1男子	1	0	1
中1女子	3	3	0
小6男子	0	0	0
小6女子	4	1	3
小5男子	0	0	0
小5女子	0	0	0
計	15	9	6

表1-2 被験者の内訳2010

3. 分析の結果

(1) 自分から声をかけた人数の割合の推移

個々の参加者が他の参加者のうち、どれだけの参加者に声をかけたかを割合で示してみる。2009年の本キャンプが図3-1、2010年の本キャンプが図3-2である。どちらの図からも、1日目から全員に声をかけ、6日目まで全員への声かけが続いている参加者がいることがわかる。一方、1日目や2日目には自分から声をかける人数が全体の半数に満たない参加者もいるが、その参加者も徐々に声をかける人数が増えてきている様子がうかがえる。

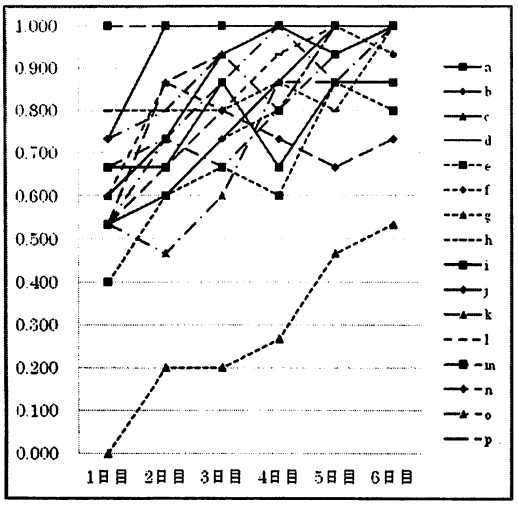


図 3-1 声をかけた人数の割合の推移 2009

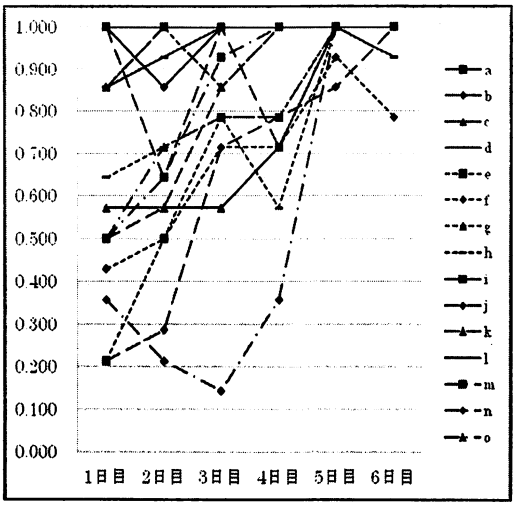
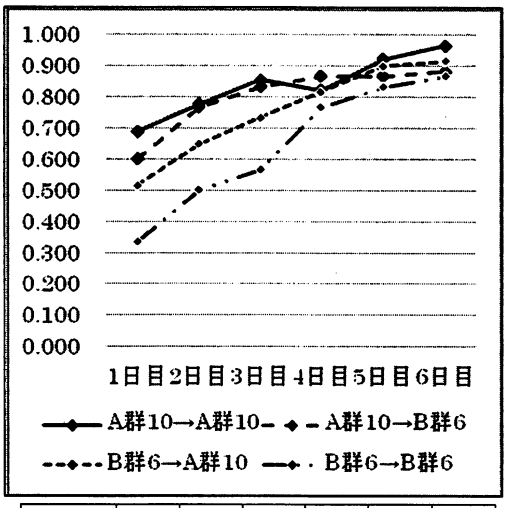


図 3-2 声をかけた人数の割合の推移 2010

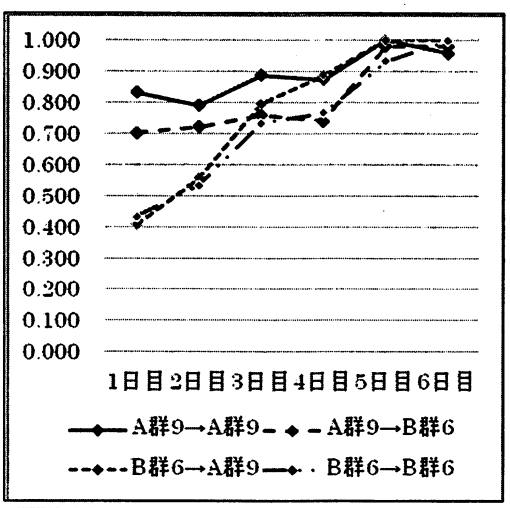
(2) 声をかけた割合の推移（各群から各群）

次に、参加者の所期の思いによって声をかけあう状況について、仲間づくりを期待するA群と仲間づくりへの期待が文言に表れていないB群とで参加者の毎日の声かけの数に違いがあるかをみてみることにする。A群の参加者からA群の他の参加者へ、あるいはB群の参加者へといったように、各群別に各群から各群に声をかけた割合を示した。例えば、A群のある参加者が、A群の残りの参加者のうち何割の参加者に声をかけたかを示したものが、A群からA群への声かけの割合である。



	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群10→A群10	0.689	0.778	0.856	0.822	0.922	0.967
A群10→B群6	0.600	0.767	0.833	0.867	0.867	0.883
B群6→A群10	0.517	0.650	0.733	0.817	0.900	0.917
B群6→B群6	0.333	0.500	0.567	0.767	0.833	0.867

図 4-1 声をかけた割合の推移 2009(各群から各群)



	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群9→A群9	0.833	0.792	0.889	0.875	1.000	0.958
A群9→B群6	0.704	0.722	0.759	0.741	0.981	0.981
B群6→A群9	0.407	0.556	0.796	0.889	1.000	1.000
B群6→B群6	0.433	0.533	0.733	0.767	0.933	1.000

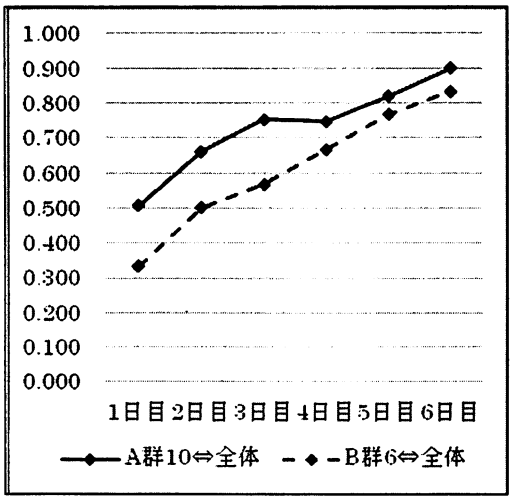
図 4-2 声をかけた割合の推移 2010(各群から各群)

2009年の本キャンプ（図4-1）では、A群の参加者が他のA群の参加者に声をかけた割合は、1日目で0.689であるが、3日目に0.856で8割を超え、5日目には0.922で9割を超えている。また、A群からB群に対して声をかけた割合も、1日目は0.600であるが、3日目に0.833で8割を超えるなどその後も上昇している。一方、B群の参加者がA群の参加者に声をかけた割合は、1日目では0.517であり、A群からの声かけよりも低い割合となっている。しかし、3日目に0.733、5日目には0.900となり、声をかける割合は上昇を続けている。B群同士の声かけの割合は、1日目が0.333であり、B群からA群の声かけの同割合よりもさらに低いものとなっている。しかし、5日目には0.833となり、他に近い割合に近づいてきている。

2010年の本キャンプ（図4-2）では、A群の参加者が他のA群の参加者に声をかけた割合は、1日目で0.833となり、その後も増減はあるものの高い割合を示している。A群からB群に対しても1日目で0.704であり、4日目まで7割台を推移し5日目には0.981となっている。B群からA群、B群からB群に対しての声かけも、6日目には1.000となったように日ごとに高い割合に上昇しているが、1日目については、B群からA群が0.407、B群からB群が0.433であり、A群からの声かけと比べて大きな差がある。

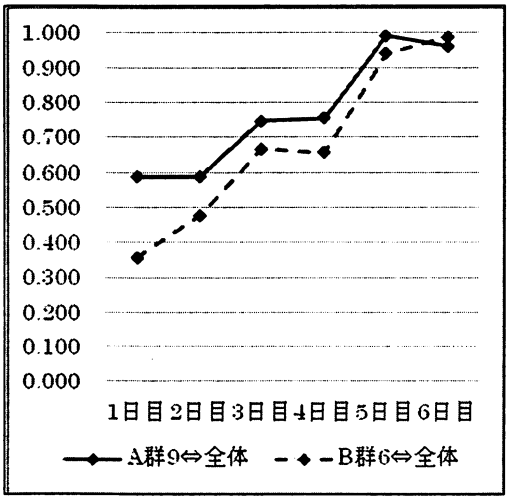
(3) 互いに声をかけあった割合の推移（各群と全体）

(2)では各群から各群への声をかけた割合を示したが、自分から声をかけ、さらに他の参加者からも声をかけてもらうこと、つまり、互いに声をかけあった数について各群別の割合を示したものが図5-1、図5-2である。例えば、A群のある参加者が、残りの参加者全員のうち何人に声をかけ、声をかけた参加者からも声をかけられたかの割合を示したものがA群と全体との声をかけあった割合である。



	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群10⇔全体	0.507	0.660	0.753	0.747	0.820	0.900
B群6⇔全体	0.333	0.500	0.567	0.667	0.767	0.833

図5-1 互いに声をかけあった割合の推移2009(各群と全体)



	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群9⇔全体	0.587	0.587	0.746	0.754	0.992	0.960
B群6⇔全体	0.357	0.476	0.667	0.655	0.940	0.988

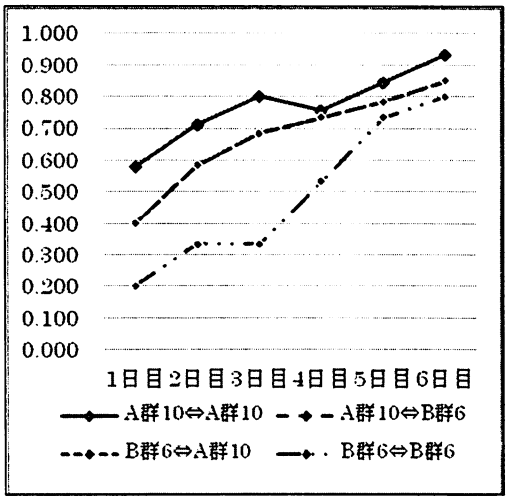
図5-2 互いに声をかけあった割合の推移2010(各群と全体)

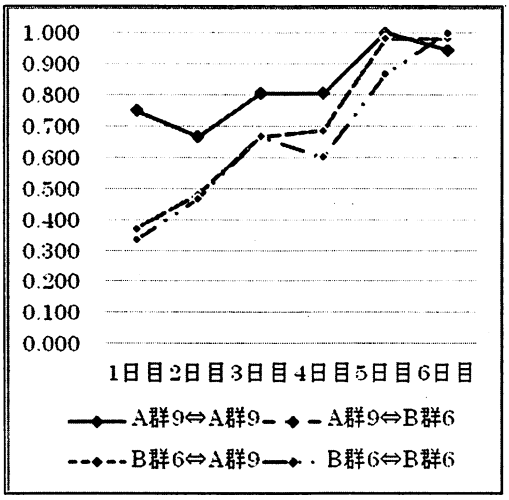
2009年の本キャンプ（図5-1）では、A群の参加者が1日目に互いに声をかけあった割合は0.507である。A群の約半数であるが、B群の0.333を大きく上回っている。A群のこの割合は、3日目には0.753、5日目には0.820に上昇し、6日目には9割に達している。一方、B群についても2日目に5割に達し、6日目に0.833となり日ごとに上昇している。A群とB群との割合の差も徐々に小さくなってきている。

2010年の本キャンプ（図5-2）では、A群の1日目の割合は0.587であり、B群の0.357を大きく上回っている。A群のこの割合は、3日目には0.746、5日目には0.992に上昇し、5日目でほぼ全員が互いに声をかけあう状況が生まれたことがわかる。一方、B群についても3日目に0.667、5日目に0.940に上昇している。A群とB群の割合の差も徐々に小さくなり、5日目でA群とほぼ同じ割合に達している。

(4) 互いに声をかけあった割合の推移（各群と各群）

(3)では、各群内の全体における互いに声をかけあった割合を示した。次に、A群のある参加者とA群の他の参加者との互いの声かけ、あるいはB群の参加者との互いの声かけといったように、各群別に各群と各群が声をかけあった割合を示した。例えば、A群のある参加者が、A群の残りの参加者のうち何割の参加者と互いに声をかけあうことができたかを示したものが、A群同士が声をかけあった割合である。





	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群10⇔A群10	0.578	0.711	0.800	0.756	0.844	0.933
A群10⇔B群6	0.400	0.583	0.683	0.733	0.783	0.850
B群6⇔A群10	0.400	0.583	0.683	0.733	0.783	0.850
B群6→⇔B群6	0.200	0.333	0.333	0.533	0.733	0.800

図6-1 互いに声をかけあった割合の推移2009(各群と各群)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
A群9⇔A群9	0.750	0.667	0.806	0.806	1.000	0.944
A群9⇔B群6	0.370	0.481	0.667	0.685	0.981	0.981
B群6⇔A群9	0.370	0.481	0.667	0.685	0.981	0.981
B群6⇔B群6	0.333	0.467	0.667	0.600	0.867	1.000

図6-2 互いに声をかけあった割合の推移2010(各群と各群)

2009年の本キャンプ(図6-1)では、A群同士の声かけの割合は、1日目が0.578であり、3日目に0.800、6日目には0.933となるなど、2日目以降7割以上の割合で概ね上昇をしている。A群とB群との声かけの割合は、1日目が0.400であり半数に至らないが、3日目

が0.683、6日目は0.850と日ごとに上昇をしている。一方、B群同士の声かけは、1日目が0.200、3日目でも0.333であり、低い割合となっている。しかし、5日目に0.733、6日目には0.800となり、本キャンプの後半で高い割合に上昇している。

2010年の本キャンプ(図6-2)では、A群同士の声かけの割合は、1日目が0.750であり、2日目に0.667とやや減少するものの、3日目に0.806、5日目には1.000となるなど、互いの声をかけ合う状況ができあがっていることがわかる。一方、A群とB群との声かけやB群同士の声かけの割合は、1日目ではA群とB群との場合0.370、B群同士の場合0.333であり、A群同士の声かけの割合と比べて差があることがわかる。3日目では、A群とB群との場合、B群同士の場合とも0.667であり、5日目にはA群とB群との場合0.981、B群同士の場合0.867であり、A群同士の場合に近い割合になっている。

4. 考察

本研究は、事業への思いを記した文言から仲間づくりを期待する参加者群とそれが表れていない参加者群に分類し、毎日の活動終了時に記録するふりかえりカードの記述をもとに、それぞれの日々の声かけの様子を分析した。

仲間づくりを期待する参加者同士は、本キャンプ1日目から互いに声をかけあっている。仲間づくりへの意識を互いが持っている場合、声かけしやすい状況が生まれ、仲間意識を持ちやすいことがうかがえる。一方で、これらの参加者は、仲間づくりへの期待が表れていない参加者に対しても声かけを続けている。仲間づくりへの期待が所期の思いとして表れていない参加者の場合、互いに声をかけあう状況が作られるのに日数がかかることもうかがえたが、5日目や6日目には参加者のほぼ全員に声をかけあっている。

つまり、仲間づくりを期待する参加者からの継続的な声かけが、他の参加者にも声かけの行動を誘発し、本キャンプ開始から5日目で仲間意識を全体に広げていることが明らかとなった。

このような組織キャンプでは、集団での活動機会が多くあり、参加者同士が協力しながら活動し生活していくことから、活動の早い段階において他の参加者との人間関係を形成し、グループ運営につなげていくことは不可欠である。仲間づくりの意識のある参加者の継続的な行動が、他の参加者の行動にも拡大していることから、仲間づくりへの思い持つ参加者を事前のグループ構成の際に意図的に配置することで、その後のグループ運営に生かしていくことができると考えられる。

5. 今後の課題

今回、仲間づくりの意識について、参加申込書と1週間後の自分宛の手紙の文面から参加者一人ひとりの所期の思いを把握した。しかし、仲間づくりへの思いを持っていても文言に表れていない場合や、文章に記していても強い思いは持っていないことも考えられる。事業への参加に際して抱いている思いや期待について、より客観的にデータを得る手法を今後検討していく必要がある。

また、学校が同じであったりこの事業の経験者であったりするなど参加者同士が元々顔見知りであること、年齢や性別など参加者の属性が声かけの頻度に影響していることが考えられる。この事業の構成においても、参加者が15～16人であり比較的少数の組織キャン

プであることや、毎日誰に声をかけたかを記録する作業を行っていることも互いに声をかけあう意識に結びついていることが考えられる。

さらに、1週間の本キャンプの前に日帰りの事前学習会と1泊2日のプレキャンプを行い、本キャンプ1日目から声かけしやすい環境が整えられていることも一因になりうることが考えられる。加えて、本キャンプ中は声をかけあう必要性が生じやすいプログラムを時間の経過にあわせて配置しており、このことと声かけ数の推移との関連も考えられる。

これら他の条件も考慮に入れて、声かけの仕組みを多面的に捉え、より正確な結果を得ていきたいと考える。

引用文献

1) 東京YMCA野外教育研究所『野外教育の理論と実際－組織キャンプ入門』学文社、1996、p. 6
2) 星野敏男「我が国における野外教育に関する研究」(『明治大学人文科学研究所紀要』48、pp. 433-448、2001) p. 435
3) 星野敏男・金子和正『野外教育の理論と実践』杏林書院、2011、pp. 23-31
4) 相川充・津村俊充『社会的スキルと対人関係－自己表現を援助する』誠信書房、1996、pp. 3-21
5) 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴「組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果」(『野外教育研究』5(2)、pp. 45-54、2002) p. 52
6) 東雅宏「キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について」(『キャンプ研究』11(3)、pp. 9-13、2008) p. 13
7) 『白山市アドベンチャーキャンプ2010実施報告書』白山市アドベンチャーキャンプ実行委員会、2010、p2